



The cover of the magazine 'aficionado' features a photograph of a man with glasses and a white shirt speaking into a microphone at a podium. Behind him is a blue banner with white text that reads 'The World Health Org Committee for Western China 21 - 25 September 2009'. Below the photo, the title 'aficionado' is written in a large, stylized, italicized font. Underneath the title, it says 'edited by dr. masato mugitani' and 'vol.6-no.3'.

アムステルダム

麦谷眞里

(まえがき)ジム・スタインマイヤーがこれでもかこれでもかと出し続けているセルフ・ワーキングの手品の本があります。“Impuzzibilities”というシリーズですが、現在(2022年2月)までに合計10冊刊行されています(写真926)。



写真926

書名の“Impuzzibilities”は造語ですので辞書で引いても出て来ません。「パズルのように見えてパズルでなく手品として演じることができる」というほどどの意味でしょうか？今回は、このうち、

最新刊の"Bewildering Impuzzibilities"に収載されていた原理を使う手品を構成してみます。Bewilderingは、「戸惑う」とか「途方にくれる」という意味の英単語で、手品の商品名では多用される言葉です。この第10巻の冒頭に"Ovations"というタイトルの手品があって、スタンディング・オベイションでご存じの通り、「拍手喝采」とか「大人気」という意味です。今回の手品の原理はAlex Ramonという人が創案したと書いてありますが、原理から演繹的にこの手品に応用したことであって、原理を創案したというのではないと思います。

[現象]マジシャンは、ロンドン、アテネなどの世界の都市名が書かれた4枚のカードを示します。カードは樹脂製で片面が黒色、片面が銀色です。両面のそれぞれに都市名が書いてありますので都市名は全部で8つあります。この4枚のカードを観客に手渡し、観客が自由にシャッフルしながら、最後に1枚のカードを選びます。そのカードに書いてある都市名が、あらかじめマジシャンによって予言してあるのです。

[必要なもの]

①両面が異なる色のカード 4枚

私の解説で使われているカードは樹脂製ですが、紙製でかまいません。ただし、表と裏の色が異なるものが必要です。ジム・スタインマイヤーの使っているのは片面が赤でもう片面が白の紙です。そのような配色の紙製のカードが市場で容易に見つからなかったために、この解説では樹脂製の黒色/銀色のカードにしました。

②このカードの両面に以下に示すような都市名を書きます。樹脂製のカードには記入する筆記具の選択が難しかったので、この解説では、ラベルプリンターで印字したものを持っています（写真927：左が黒い面で右がその裏の銀色の面です）。



写真927

都市名はこれに拘泥するものではありません。都市名の文字数が重要で、上から順に、両面の構成が、「4文字と6文字」、「8文字と6文字」、「4文字と12文字」、そして「3文字と7文字」であれば、どのような都市名でもかまいません。私が今回選んだのは、「ペルリンとアジスアベバ」、

「サンフランシスコとバンクーバー」、「ロンドンとセントクリストファー島」、そして「アテネとアムステルダム」の4枚です。また、そのように考えると、特段、都市名でなくともよく、国名でも、野菜や果物の名前、さらには人名でもよいのです。しかしながら、カードの操作は一文字ごとにカード一枚ずつトップからボトムへ送る作業を観客が行ないますので、観客が迷うような拗音(小さい「や ゆ ょ」など)や促音(小さい「っ」など)の混じった名称のものは避けたほうが無難です。さらに、都市名ですと、12文字の長さの都市名は世界にもあまり例がなく、今回は、かろうじて「セントクリストファー島」を使っていますが、「松旭斎天勝」(しょうきょくさいてんかつ)は拗音も含めて12文字ですので、人名のほうが選択は多いかもしれません。

③予言の紙もしくは板

実は、ジム・スタインマイヤーの演出は、ここに解説しているものとはまったく異なり、英語の単語と手品を演じるときの観客の反応などの内容をひとつの演出として語りながら行なうもので、そもそも予言の形式ではありません。興味のある方は、"Bewildering Impuzzibilities"を購入されて確認されるといいと思いますが、きっとがっかりされます。

さてそこで、今回の「予言」ですが、あらかじめ印字されたような予言は作っておかないほうがいいと思います。なぜなら、そういう既成の予言があると、どんなふうにシャッフルしても、その結果になるのだと観客にヒントを与えてしまうからです。それを回避するために、演技の最初に、観客の顔を見ながら、紙にペンで予言を書くか、黒板などに予言を書きます。したがって、予言の形式によって、紙と筆記用具や黒板と白墨やホワイト・ボードとマーカーが必要です。私は小さな手品用黒板(仕掛けのないほう)を使っています(写真928)。

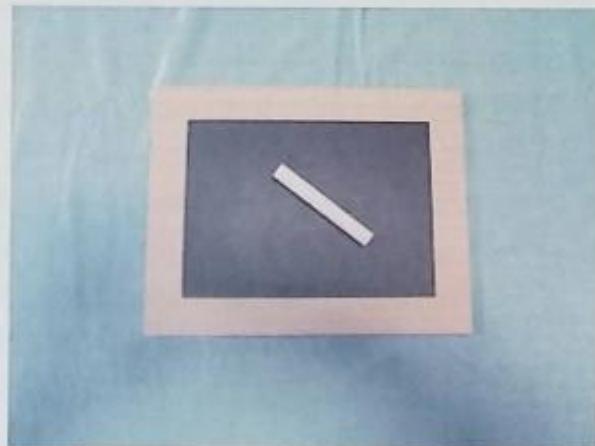


写真928

[やり方]

- ①まず、観客の1人に向かい、「ここに、8つの都市を書いたカードがありますが、これから、あなたに自由にひとつの都市を選んでもらいます」と言いながら、4枚のカードの表と裏を見せ、異なる都市名の書いてあることを示します。
- ②「それでは、これからあなたが選ぶ都市を予言しておきます」と言いながら、黒板を手に取り、白墨で『アムステルダム』と書きます。もちろん、観客からは見えないように書きます。書いたら、

黒板は伏せてテーブルの上に置きます。「ここに置いておけば、誰もこの予言を交換することはできません」と付け加えます。

- ③4枚の樹脂製カードを観客に手渡します。「まず、4枚のカードを黒い面が上になるようにしてそろえてください」カードはすべて、片面が黒、反対側の面が銀色になっていますから、観客に黒い面が上になるようにそろえるように指示します。また、そろえるときには、都市名が観客から観て読みやすいように方向を統一してもらうことも忘れないでください。
- ⑤「それでは、その4枚のカードを満足するまで自由に混ぜてください。ただし、黒い面を上にしましたまです。そしてお好きなところで混ぜるのをやめてください」観客が手を止めます。
- ⑥観客が混ぜるのを止めたのを確認したら、「いま、一番上になっている都市を観てください。その都市の名前の数だけ、上から一枚ずつカードを下へ回してください。たとえば、ロンドンだったら、ロ、ン、ド、ン、と言いながら一枚ずつ4枚のカードを上から下へ回すのです」このとき、観客がその通り行なうかを観察します。まちがっていたら、そうではありません、こうするのです、と具体的にジャスチャーなどを交えて指示します。
- ⑦観客が都市名の数だけカードを送ったら、「そうしたら、一番上になっているカードをテーブルの脇に除けてください。これでカードは3枚になりましたね」と言います。
- ⑧「そうしましたら、今度は、その3枚のカードをそのまま3枚ともひっくり返して、銀色の面が上になるようにしてください」観客がそのようにするのを待ちます。「それでは、カードを自由に混ぜてください。適当なところで混ぜるのを止めていいですよ」と言います。
- ⑨観客が手を止めたら、「今度も一番上になった都市名を観て、その都市名の文字数だけ、カードを上から下へ回してください」と言います。「バンクーバーなら、バ、ン、ク、ー、バ、ーと6枚のカードを回します」と具体的な例を挙げて説明します。
- ⑩観客がカードを上から下へ送ったら、さきほどと同じように、一番上のカードをテーブル上に出して捨ててもらいます。これで残ったカードは2枚になりました。
- ⑪「今度も残った2枚のカードを自由に混ぜていいのですが、今度は、黒が上でもいいですし、銀色が上でもいいです。あるいは、黒と銀をごちゃ混ぜにして混ぜてもかまいません」と言います。要するにどんなふうに混ぜてもいいのです。
- ⑫「混せたら、お好きなところで止めてください」観客が手を止めます。「一番上の都市名を観て、その都市名の文字数だけ、上から下へカードを送ってください」観客がそのようにします。「そうしましたら、最後に上になっているカードをテーブル上に出して捨ててください」と言います。
- ⑬そうすると、観客の手にカードが1枚だけ残ります。「最後に1枚だけカードが残りましたね。あなたは自由にカードを混ぜました。そして最後に1枚だけ残りました。このカードには、表と裏にひとつずつ都市名が書いてあります。そのうち、長いほうの都市名があなたの選んだ都市になります。カードを観てください。都市名はなんですか？」と訊ねます。
- ⑭観客は、「アムステルダム」と答えますから、おもむろに黒板の予言をひっくり返して、予言が当たっていたことを見せます(写真929)。



写真929

[コメント]

どのように混ぜてもこのような結果になります。まさにセルフ・ワーキング・トリックです。なぜこのような結果になるかを数学的に別項で説明してあります。ちなみに、ジム・スタインマイヤー自身は、この原理の数学的なことについては一切触れていません。また、すでに述べたように、もちろん、都市名ではなく、文字数を合わせさえすれば item はなんでもいいのです。前述のように創案者は Alex Ramon と紹介してありますが、数学的原理は単純なものです。黒色と銀色が、4 文字—6 文字、8 文字—6 文字、4 文字—12 文字、3 文字—7 文字と構成されていれば可能です。ぜひ、ご自分の嗜好で item をお選びください。

[数学的説明]

- ①簡単に言うと、4枚のカードのうち、3枚は、両面とも偶数文字で、1枚だけ両面とも奇数文字で、いまの手順の場合、カードの枚数が偶数であれば、偶数文字のカードを捨てることになります。カードの枚数が奇数のときは、奇数のカードが一番上に来て止まることをあらかじめ防いでありますので、やはり偶数のカードを捨てることになるのです。その結果、最後に奇数文字のカードが残り、3文字と7文字と、長いほうの7文字の都市名が自動的に選ばれます。
- ②そんなふうに言われてもすぐにわからないと思いますから、少し具体的に説明してみます。4枚の黒色カードの文字数は、4と8と3です。したがって、シャッフルのあと、4文字か8文字が一番上にくれば、4枚、8枚送っても、同じカードが再びトップに来ます。シャッフル後3文字が一番上にいた場合は後述します。
- ③4文字と8文字の場合は、そのカードがテーブル上に捨てられますので、結果は、4文字の一方がない3枚か、8文字のない3枚かです。
- ④4文字は場合分けになりますので、8文字を捨てた場合を先に解説します。8文字を捨てると、残った3枚は、3文字1枚と4文字2枚です。しかし、ここでカードをひっくり返しますので、残っている3枚は、6文字と7文字と12文字です。これをシャッフルすると、カードは3枚しかないですから、6文字と12文字は、最初にこれが一番上にあれば、6枚や12枚送ったあとも同じカ

ードが一番上に來るので、どちらかのカードを捨てることになります。

⑤ここで、カードを点検すると、偶数の文字数が両面に書かれたカードと奇数の文字数が両面に書かれたカードの2枚だけが残っていることになります。カードは2枚しかありませんから、最初に偶数の文字数のカードを一番上で始めると、そのカードが最後も上に来て、それを捨てることになります。一方、奇数のカードが一番上にあった場合は、カードを送った後で、最後に奇数のカードを下に回しますので、偶数のカードを捨てて、奇数のカードすなわち、3文字と7文字のカードが残ります。予言は7文字のカードです。

⑥④に戻ります。8文字が残って4文字の一方を捨てた場合でも、全体をひっくり返せば、いずれも奇数は7文字だから、捨てるのは偶数文字のカードになり、最後に、両面偶数文字のカードと両面奇数文字のカードが残ります。そして最後に両面奇数文字のカードが残ります。

⑦②に戻ります。シャッフル後、3文字が一番上にあった場合は、3枚だけカードを送りますから、必ず偶数文字のカードが一番上に来ますので、そのカードを捨てることになります。どのカードを捨てても、残りの3枚をひっくり返せば(ひっくり返さなくても)、奇数文字のカードは1枚しかありませんからそれが残ります。

⑧以上が原理です。原理がわかったら、文字数も上記のような例でなくともいいことがわかると思います。ただ、今回は、ジム・斯坦マイヤーに敬意を表して、内容は異なりますが、彼が解説した方向を踏襲してあります。

ダブル・デッカー・デックを使って

麦谷眞里

(はじめに)10年ほど前にドイツの奇術用具店 Card-Shark から、ダブル・デッカーという呼称のデックが売り出され、もの珍しさもあって購入しました。ケースにロンドンの2階建てバスがデザインされていたので、なるほどダブル・デッカーという銘柄なのかと思っていました(写真930)。



写真930

ただし、この2階建てバスのケースは、本当のカード・ケースにカバーとしてかけられているだけで、カバーを外すと普通のカード・ケースになります。そうでなければ、ケースを取り出しただけでダブル・デッカーとわかつてしまします。

さて、このデックを手にして驚いたのは、それぞれのカードが通常の半分の厚さ(薄さ)で、したがって、普通は52枚でいっぱいのカード・ケースに104枚入っていたのです。つまり、2つのデックの厚さでひとつのデックの厚さになるということです。しばらくの間、この2倍のデックで何か画期的な手品ができるかと考えていましたが、なにもいいアイデアが浮かばないまま時間が過ぎて行き、そのうち忘れてしまいました。いまでは、このとき購入したダブル・デッカー・デックが自分の収納棚のどこにあるのかもわかりません。

突然、このデックを思い出したのは、ロシアのマジシャンが発表した"QUANTUM CARD"という手品を読んだときです。そもそも、ロシアのマジシャンというのも珍しいですし、発想もユニークで、読むと、一回くらいは自分でやってみたくなります。ただし、他人のことは言えませんが、書いてある文章の英語は変な英語です。なるほど、と思ったのは、バーノンの「ブレインウェーヴ・デック」をひとつのデックで行なうにはダブル・デッカーが相応しいと言っていることで、感心しました。確かに、「ブレインウェーヴ・デック」は赤裏と青裏の2つのデックを準備しなければならず、しかも、客が自分の選んだカードを言ってからデックの取り出す方向を決めることになります。それが、最初からデックが一組だけテーブルの上に置いてあるのは魅力です。ところが、ロシア人たち(3人のマジシャンが関与しています)は、それにさらなる現象を付け加えました。それでは、まず、その"QUANTUM CARD"の現象だけを紹介してみます。

1. "QUANTUM CARD"の現象

テーブル上に青裏のデックが2つあります。まず、ひとつのデックをケースから出して表裏を拡げて見せて点検した後シャッフルし、観客に任意のカードに触れてもらいます。この選択は観客の自由意思です。たとえば、そのカードがダイヤの6だったとします。マジシャンは、もうひとつの青裏のデックをケースから出して裏向きのまま拡げて行くと、一枚だけ表向きになっているカードがあります。それがダイヤの6です。しかも、そのダイヤの6を抜き出して裏向きにすると、そのカードだけが赤裏です。そこで、マジシャンは、残っている裏向きのカードを表向きにして拡げると、すべてのカードが真っ白なブランク・カードなのです。

2. 考察

鮮やかです。ただし、これはダブル・デッカーではなく、普通のデックを使っています。これは今回の本旨ではないので簡単に書きますと、観客にカードを選ばせるほうの青裏のデックは、◆A～◆7、♡A～♡7、♦8～♦K、♧8～♧Kの26枚と、これとまったく同じペアの26枚を上半分と下半分に配置したデックです(写真931)。そういう言い方があるかどうかわかりませんが、26ウェイ・フォーシング・デックです。写真はわかりやすいように上半分と下半分の順序をそろえてありますが、実際の演技では、この52枚をシャッフルしますので、その必要はありません。

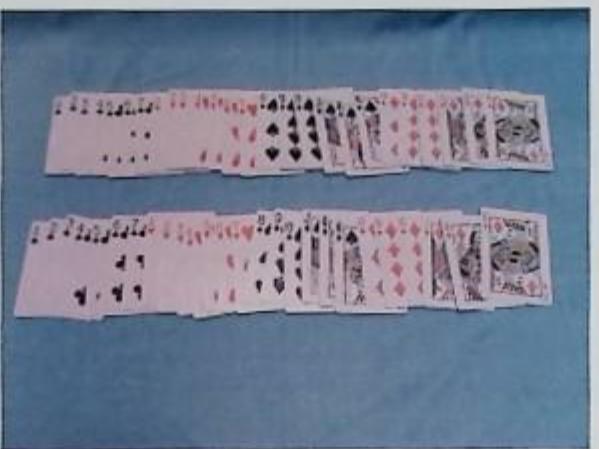


写真931

次に、この26枚と同じ26枚のブランク・バックカードを用意して、同じく青裏のブランク・フェイス・カード26枚とフェイス同士をラフ加工でくっつけます(写真932)。



写真932

これで大体おわかりだと思いますが、最初の26ウェイ・フォーシング・セットの青裏デックをシャッフルして、この中から観客に任意にカードを1枚選ばせます。選ばせ方は自由でかまいません。観客が選んだら、そのままテーブルの上に表向きにします。このとき、マジシャンにも何のカードかわかります。

そこで、もうひとつの青裏デックをカード・ケースから取り出して両手の間に裏向きに拡げて示しながら、ラフ加工でくついている26枚の表向きのカードの中から、いま観客の選んだカードだけが表向きで出て来るよう探し出します。このデックの26枚は、ストートも数字も順序良く並んでいますから観客のカードを探すのは容易です。ただし、この表向きのカードはブランク・バックですので、これを抜きだして、一旦、そのまま青裏デックのトップに載せます。このとき、青裏デックのトップには、青裏／赤裏のダブル・バックを配置しておいて、両面テープなどで観客のカードとくっつけてひっくり返すのです。あとは、残りのデックを表向きに拡げればすべてブランク・カードに見えます(写真933)。

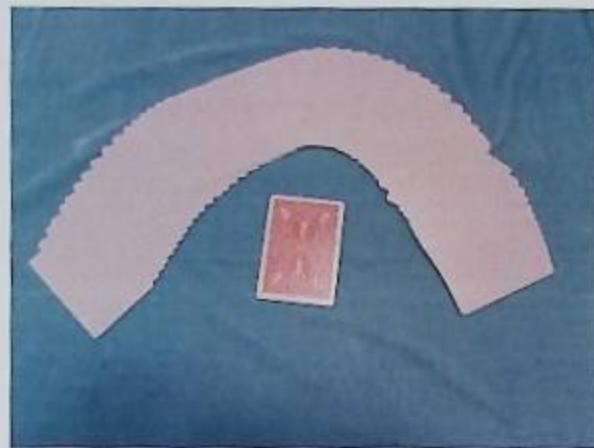


写真933

[コメント]

客のカードの裏の色をダブル・バックで処理して、残りのデックがすべてブランクであることを示すこの手順を、あたかもダブル・クライマックスのようにロシア人は書いていますが、そもそも、バーノンの原案でも、最後に客のカードを青裏／赤裏のダブル・バックで示すのなら、赤裏（青裏でも）カードをすべてブランクにしておけば、同じ効果が得られます。そのようにしなくて赤裏青裏の選択に留めて、客の選んだカードだけがデックの中で赤裏（もしくは青裏）だったという単純現象にしたところが、いわばバーノンの良さであって、ダブル・バックを使う面倒な手技を付け加えなかったからこそ単売商品として成功したのです。それをまったく元に戻して余計なクライマックスを付け加えるのがマニアの悪いところです。ロシア人の唯一の改良点は、観客の選択を26枚に狭めたことで、その代わり、余計なデックがもうひとつ必要になっています。

3. ダブル・デッカーを使う

ここからが、今回の本論です。バーノンの「ブレインウェーヴ・デック」は間違いなく秀作ですが、26枚ずつの赤裏のカードと青裏のカードがフェイス同士のラフ加工でくっついている以上、客が心に思ったカードを聞くまでは、デックを客の前に取り出すことができません。ところが、ダブル・デッカーは、なにしろ、52枚のカードすべてがフェイス同士でくっついていますので、最初からデックをテーブルの上に置いて、客に、52枚のうち、好きな1枚を心に思ってくれるように言うことができます。これには、さすがのバーノンもびっくりするでしょう。

[現象]客が心に思ったカードだけが青裏のデックの中で表向きになっています。しかも、客のカードだけが赤裏です。さらに、残りのカードを拡げてみると、すべてブランク・カードです。

[必要なもの]（写真934）

- ①ブランク・バックのダブル・デッカー・デック 1組
- ②青裏でブランク・フェイスのダブル・デッcker・デック 1組

- ③赤裏／青裏のダブル・パック・カード(②の裏模様と同じもの) 1枚
- ④ラフ加工用のスプレーかスティック 1本
- ⑤両面テープ 少々



写真934

現在、ダブル・デッカー・デックは、ドイツの奇術用具店 *Card-Shark* の商品しかありませんが、幸い、*Card-Shark* は世界中のディーラーに商品を卸していますし、欧米の大きな奇術大会にはほとんどブースを出していますので、ダブル・デッカー・デックも入手が容易です。購入されたい方は、いつも日本でご自分が使われている奇術用具のディーラーに問い合わせると喜んで取り寄せてくれます。もちろん、ドイツの *Card-Shark* に直接注文することもできます。ただし、当たりまえのことですが、ドイツに直接注文すると送料や関税がかかりますので、注意してください。海外のディーラーに注文すると、万が一トラブルが発生したときに面倒ですし、ストレスです。余談ですが、実際に私の経験したことをいくつか紹介しますと、かつて合衆国ボストンに Hank Lee という奇術用具店がありました。カタログもニュースレターも充実しているのですが、とにかく注文したものを持って来ないので閉口しました。おそらく、カタログには載せたけれど、実際には在庫がない、客から注文があって始めてメーカーにオーダーしていたのではないかと思われます。何度も催促しても持って来ないので、もう彼に注文することはやめようと思っていた矢先、Hank Lee (本名 Harry Levy) 本人が詐欺で逮捕されて刑務所に収監されました。すでに刑期を終えて出て来たと思いますが、さすがに手品の世界には戻って来ていないようです。また、名前は忘れてしましましたが、HPから注文したのに何も送って来なくて、そのうちHPも閉じられてしまって、まったくアクセスできなくなってしまった奇術用具店もあります。もちろん、お金は返って来ません。もう一人は、Roy Kueppers というギャフ・コインの専門店で、3度ほど注文しましたが、一度も送って来ません。問い合わせると、「送った」というメールが来ます。しかし、一度も届いたことはありません。これも、お金は取られっぱなしで1ドルも返って来ません。このメーカーの名前はオーナーの個人名だと思いますが、驚いたことに、いまでも、いろんなディーラーの通販サイトでこの人の商品の名前は見かけるので、ギャフ・コインの供給の商売はしているようです。不思議な人です。さて、*Card-Shark* はそういうことはないと思います。

[準備](写真935)

- ①ブランク・パックの52枚のレギュラー・フェイス側にラフ加工します。残りの52枚は使いません。
- ②青裏ブランク・フェイスの52枚のブランク側にラフ加工します。残りの52枚は使いません。
- ③ラフ加工したブランク・パックのレギュラー・フェイス面にラフ加工した青裏のブランク・フェイス面を一枚ずつくっつけて、104枚のデックを作ります。ラフ加工する場合は、スプレーとステックのどちらがいいか迷われると思いますが、ラフ加工は必ずしも全面にする必要はないので、スプレーでもステックでもあまり差異はありません。
- ④ここで重要なことがあります。客の心に思ったカードを裏向きで探さねばならないことです。このため、カードのストートや数字を一定の順序で並べ、かつ探しやすいようにたとえば、「7」のカードに裏からわかる目印をつけておきます。例を挙げると、A, 2, 3……10, J, Q, Kの順にして、さらに◆♡♦♧の順にしておき、この場合、7♣, 7♡, 7♦, 7♧のカードに目印をつけておけば、この7を中心にして客のカードを探すことができます。
- ⑤赤裏／青裏のダブル・パック・カードをデックのトップに青裏が上になるようにして載せ、この裏に、小さな両面テープを右上隅と左下隅の対角線上に貼りつけておきます。両面テープの大きさは、5mm四方以下の小さなものでかまいません。また、右上隅と左上隅にしたのは、対角線で固定すると、しっかりとズれないように接着できるのと、仮にマジシャンが右利きの場合は、デックを両手を持って拡げても、トップ・カードの右上隅と左下隅にはマジシャンの指がかからないため、指が両面テープについたりするのを避けるためです。したがって、左利きの方は、逆に、両面テープの位置を、トップ・カードの左上隅と右下隅にする必要があります。



写真935

[やり方]

- ①ポケットから青裏のカード・ケースを取り出して、テーブルの上に置きます。観客の一人に向かい、「トランプには52枚のカードがありますが、その中の、どれでもいいですから、心の中で一枚だけ思い浮かべてください」と言います。客が思い浮かべた、と言ったら、「もちろん、変えてもいいですよ」と言いながら、カード・ケースを開けて青裏のデックを取り出します。
- ②「この52枚のトランプの中のどれでもよかったのですが、あなたが心に思ったカードはなんで

したか？」と訊きます。客が答えます。ここでは、ハートの6だったとします。「ハートの6ですか？珍しいですね。普通は、ハートのエースとか、そんなトランプが多いのですが…」と言いつつ、デックを裏向きで拡げながら、ハートの6を探します。この場合、デックは上から◆♥♦のAから順に並んでいますから、まず、目印をつけてあるハートの7を探し、そのすぐ上のハートの6のラフ加工を外して、表向きで出現させます（写真936）。



写真936

③「ご覧ください、すべて裏向きの51枚のトランプの中で、あなたが心に思ったハートの6だけが表向きになっています」と言って、ハートの6が表向きであることを見せ、ついで他のカードがすべて裏向きであることを示します。見せたら、表向きのハートの6をそのまま表向きで抜き出して、デックのトップに載せます（写真937）。



写真937

④デックをきちんとそろえながら、ハートの6をデックのトップに置いておいたダブル・パック・カードに押し付けて、両面テープで固定します。「しかも、あなたの選んだこのハートの6だけが、裏の色がちがうのです」と言って、右手でハートの6（とダブル・パック・カード）を掴んで一旦そのままテーブルの上に置いて、それからおもむろにひっくり返して赤裏であることを見せます（写真938）。



写真938

⑤「それだけでは、ありません。その他のトランプは、すべて真っ白なのです」と言って、デック全体を表向きにひっくり返して両手の間に拡げ、すべてブランク・カードであることを見せます(写真939)。見せたら、再びデックをそろえ、テーブルの上のハートの6と一緒にカード・ケースの中に戻して入れます。

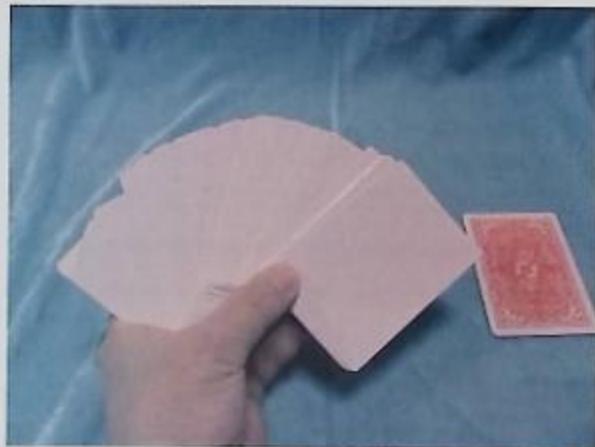


写真939

⑥この見せ方で終わってもいいのですが、デックは、ラフ加工してあるといつても、表向きにした場合は、ブランク・カードとブランク・パックのカードが見えるだけですので、少しくらい横にズレても全体がブランクであることには変わりはありません。したがって、デックを両手の間に拡げるのではなく、そのまま、表向きにしてテーブル上にリボンス・プレッドしたほうが鮮やかに見えます(写真940)。

⑦ただ、実際にリボン・スプレッドしてみると、デック全体のボリューム感があって、特にマジシャン側には後ろめたさもあって、観客にカードの多さがわかつてしまうのではないかと思いますが、まず、その心配は杞憂です。なぜなら、ラフ加工してあるので、見えているのはあくまでも52枚のカードで、仮に横にズれて少し余分に見えていたとしても、とても観客が気付くほどの多さではないからです。もちろん、心配な方は、両手の間に拡げるだけで充分です。

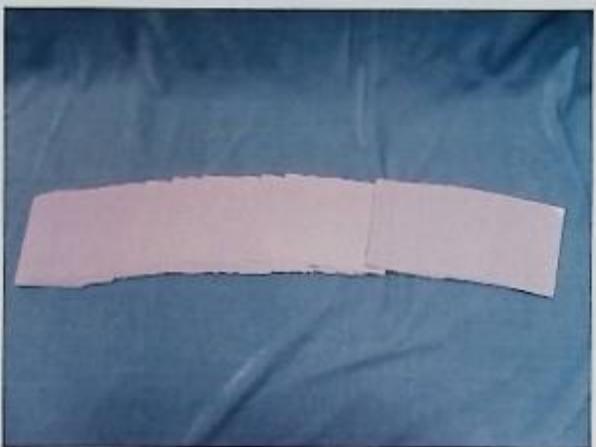


写真940

[コメント]

ダブル・デッカーを使う手品はもちろんこれ以外にもあります。一番基本的なのは、104枚のデック全体でメネケル・デックを構成することができます。厳密にはペアの一方をショート・カードにしてありませんが、メネケル・デックでできることは、ほとんど同様にできます。

たとえば、まず、半分の52枚をシャッフルして、残りの52枚を、シャッフル後のランダムなカードのそれぞれの隣にペアのカードを配置します。つまりペアが52組できることになります。このデックは、カットもできますし、オーバーハンド・シャッフルなら、カードの順序は乱れても、それぞれのペアが離れないようにシャッフルすることは可能です。

シャッフルしたあと、観客に1枚選んでもらいます。観客が選んだその場所でデックをカットしながら、ボトム・カードを見ます。ボトムにペアの2枚があれば、トップ・カードが客の選んだペアの片割れです。ボトムにペアがなければ、客の選んだペアの片割れがボトム・カードです。そこで、どちらかの客のペアカードをバームしながら、デックをテーブル上に置いて、客の選んだカードをデックの中に戻してくれるようになります。

「ところで私は1枚のカードを、この手品を始める前にポケットに入れておきましたが、それがこれです」と言ってバームしたカードを裏向きでテーブルの上に出します。客に覚えたカードの名を訊ねてから、テーブル上の裏向きのカードをひっくり返して表向きにします。客のカードです。

ダブル・デッカー・デックを購入すると、このデックを使った手順を集めたサイトのURLも一緒に書いてありますから、そこには、そのほかにも多くの応用が掲載されています。

これは、aficionado の Vol.6-No.3 です。

郵便の送付先: 〒145-0061 東京都大田区石川町2-33-1-904 マスカレイド

Eメール・アドレス: masqpart4@aol.com

これは、限定100部のうちの09／100です。

(2022年2月)